文学研究科

平成２５年度　部局自己評価報告書

Ⅲ　部局別評価指標

１　部局第二期中期目標・中期計画における特色ある取組の進捗状況と成果
※評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容

(1) 教育に関する目標

（１）初年次教育充実のため、文学部開講の１年次対象科目の「人文社会総論」「人文社会序論」「英語原書講読入門」を継続するとともに、専修決定に際する情報提供の場を増やす意味から、研究室訪問の機会拡充や各専修の授業聴講などの新たな方式を平成 24 年度に策定し、平成 25 年度から実施している。[中期計画Ｉ－１－(1)：1-1、1-2、Ｉ－１－(2)：5-1]

（２）平成 24 年度は英語で開講する授業を学部 13 科目・大学院 15 科目に拡大するとともに、平成 24 年度に採択となった「グローバル人材育成プログラム」に英語による授業を提供することとし、教育の国際化を一層推進した。また博士課程教育リーディングプログラム「グローバル安全学トップリーダー育成プログラム」に参加し、大学院教育の国際化にも貢献している。[中期計画Ｉ－１－(1)：1-1、2-1]

（３）平成 23 年 6 月に終了した本研究科の大学院 GP「歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画」は、「キュレイター養成コース」と「アーキビスト養成コース」を設置して専門分野の枠を超えた教育体制のもとに高度専門職業人としての学芸員を輩出して来たが、平成 24 年度以降も二つのコースの教育体制を継続し、大学院教育に新局面をもたらしている。[中期計画Ｉ-1-(2)：4-1]

(2) 研究に関する目標

（１）平成 24 年度が最終年度となった GCOE は、国際シンポジウム（4 回）、定期的ワークショップ（17 回）、研究部門別ワークショップ（24 回）を例年以上に活発に行い、その研究成果を著書(16 冊)・論文(92 篇)・学会発表(121 回)において公表し、全体の成果を『不平等生成メカニズムの解明―格差・階層・公正』（ミネルヴァ書房）と *Stratification in Cultural Contexts: Cases from East and Southeast Asia* (Trans Pacific Press)にまとめた。また本研究科言語学系プロジェクト「OS 型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的研究」（科研費：基盤研究(S)）は、その世界的水準の研究成果を Linguistic Inquiry や Journal of Cognitive Neuroscience などの国際誌に掲載した他、日本言語学会の第 143 回大会発表賞が授与されるなど、国内外で高い評価を得た。[中期計画Ｉ－２－(1)：8-1]

（２）東北文化研究室では平成 24 年 11 月 24・25 日に市民対象の東北文化公開講演会を開催し、研究科内のみならず他機関所属の研究者の協力のもと、「表象としての身体－死の文化の諸相」と題する学際的シンポジウムを行い、その成果を『東北文化研究室紀要』通巻第 54 集に掲載した。また方言研究センターでは、被災地域における方言の現状を調査し、その成果を学会や市民向け講演会で報告するとともに、『方言を救う、方言で救う―3.11 被災地からの提言』を刊行した。また、方言の記録と被災地支援の一環として、『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集―宮城県沿岸 15 市町』を作成するとともに、ホームページ「東日本大震災と方言ネット」でも公開した。[中期計画Ｉ－２－(1)：9-1]

（３）若手研究者の支援として、教員が企画・実施している研究プロジェクトに大学院博士後期課程の学生を RA として参画させる仕組みを定着させ 8 名採用した。また、博士の学位を取得した者を専門研究員として受け入れ、研究者番号を付与することで科研費の申請資格を得られるようにし、研究活動を促進する環境を整えている。［中期計画Ｉ－２－(2)：11-1］

(3) 社会との連携や社会貢献、国際化に関する目標

（１）研究科独自にあるいは他部局や行政などと共同して開催してきた、以下の社会連携・社会貢献事業を平成 24 年度も実施した。①有備館講座(宮城県大崎市)は平成 24 年度までに 11 期を数え その総講師数は 61 名、総受講者数は 2274 名にのぼる。「齋理蔵の講座」（宮城県丸森町）は第 5 期を実施し、これまでの総講師数は 25 名、受講者約 350 名を数えている。平成 25 年度は共に「地域再考」という統一テーマで両講座を開催中である。②高校生対象に「第 6 回青春のエッセイ　阿部次郎記念賞」の作品募集を行い、203 点の応募作品に対して、作家の高橋克彦氏をゲスト審査員に迎えて選考を行い、受賞作を『河北新報』に掲載した。平成 25 年度（第 7 回）は現在作品募集中。③附属植物園との共催による「紅葉の賀」を平成 24 年 11 月 9 日に開催し、俳句会、野点、尺八演奏、植物園内ガイド付き散策、公開講座、阿部次郎記念賞授与式を実施した。④文学研究科出版企画委員会編纂により①の講座の内容をまとめた『人文社会科学講演シリーズⅥ　男と女の文化史』及び『人文社会科学ライブラリー第 2 巻：竹を吹く人々――描かれた尺八奏者の歴史と系譜』を東北大学出版会より刊行した。前者は「日本図書館協会選定図書」に選ばれた。⑤Sage Publications との間で互恵的関係を形成し、木村邦博教授(行動科学)が「SAGE Research Method のトライアル」のアドバイザー的役割を引き受け、一方 Sage Publications 主催による「英語論文の書き方講座」を平成 25 年 5 月 22 日に開催した。［中期計画Ｉ－３－(1)：12-1、13-1、13-2］

（２）阿部恒之教授（心理学）が「名取川美化アドバイザー」として国交省東北地方整備局仙台河川国道事務所河川管理課へ提言した河川敷へのゴミの不法投棄防止策が採択され、河川の大規模整地が実施された。その成果は、日本感情心理学会第 18 回大会におきグッドプレゼンテーション賞を受賞した。［中期計画Ｉ－３－(1)：12-1］

（３）国際交流のさらなる促進・活性化をはかるため、これまで研究広報室の所掌であった国際交流業務を担う新たな運営組織を設置することとし、平成 24 年度に組織改編と規定の改正を行った。これに基づいて平成 25 年度に「国際交流室」を設置し、専任教員を 1 名増員して 2 名とし、運営会議委員でもある室長を加えて教員 3 名体制でスタートした。同時に開設した「国際交流サポート室」を中心に部局内の留学生支援・留学派遣業務を担うとともに、グローバル人材育成推進事業等と連繋しつつ、全学の国際交流促進にも貢献している。なお併せて「国際交流ディヴィジョン」を再編し、学務教育室・研究広報室との緊密な連携がはかれるよう組織を整備した。［中期計画Ｉ－３－(2)：15-1］

(4) 業務運営等に関する目標（業務運営の改善及び効率化、財務内容の改善、自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供、施設設備整備・活用、環境保全・安全管理、法令遵守、その他）

（１）文学部・文学研究科の学生からの学生生活を含む修学全般に関する質問・相談窓口を平成 24 年度から開設し、様々な相談に対応することで学生支援の一層の充実をはかっている。［中期計画Ｖ－１：20-1］

（２）廊下の蛍光灯の間引きは引続き実施し、平成 24 年度は新たに夏季の自動ドア、エレベータ、ジェットタオルの一部停止を実施し節電に取り組んでいる。また文学研究科・法学研究科合同研究棟（H 棟）、中講義棟のボイラー利用を取りやめ、平成 25 年度から計画的に寒冷地仕様のエアコンに切換え、経費節減を図る予定である。［中期計画Ｖ－２：21-1］

（３）従前は主に安全衛生管理者が屋内外の巡視を行うにとどまっていたが、平成 24 年度から月 1 回の産業医の巡視を実施する体制を整備し、安全・衛生管理者および事務職員が同行の上、毎月研究室等を巡視し、定例の安全衛生委員会に巡視結果を報告することとした。指摘事項があった場合は、速やかに各研究室に通知し、改善結果を確認している。［中期計画Ｖ－３：22-1］

(5) その他、部局第二期中期目標・中期計画に記載はないが、部局として重点的に取り組んだ事項

（１）平成 25 年 4 月 1 日からの改正労働契約法の施行を見据えて、任期付き教員の任期を見直し、職務を整理するなど、当該教員が意欲をもって研究･教育に邁進できるような制度改正を行った。また、テニュア･トラック制について、一層円滑な運営を行うことができるように配置換手続きの整備を行った。